

という言い方は押しつけがましいかもしれないが)あるのだと思う。その点で、本誌の読者と問題を共有しながら書き進めていけるということは、僕にとって望外の幸せといふべきことである。

2、児童文学史ということへのモチーフ・1

日本における「現代児童文学」は、概ね一九六〇年代、正確に言えば五九年から始まったというのが定説である。これについては次回改めて考えるが、そこから数えてすでに五十年余りが経過している。この現代児童文学の出版を担ったのは、当時二十代からせいぜい三十代前半の若い書き手たちだった。当然のことにそのかなりの人たちはすでに鬼籍に入っているが、一方で松谷みよ子、神沢利子、佐藤さとる、古田足日、山中恒、今江祥智、中川李枝子など、今も創作活動を続けたり、書き手としての影響力を持ち続けている人も少なくない。寺村輝夫、長崎源之助、砂田弘といった、近年まで存命だった書き手も加えて、この世代の書き手たちが五十年にわたって、あえていえば日本の児童文学を支配してきた。これは創作の分野に限ったことではなくて、評論・研究や翻訳の分野についても言え、前記古田に加え、鳥越信、上笙一郎、(故)上野瞭、神宮輝夫、猪熊葉子といった人たちが、長く影響力を保ってきた。これはなかなか異常なことと言えるだろう。もちろん、こ

の世代以降、数多くの書き手が登場はしているわけだが、この世代ほどの厚みとバリエーションをもった世代というのは存在しない、というか、ほとんど比較にならない。だから、日本の現代児童文学史を考える上では、このことをどう受けとめるのかということがひとつの鍵となる。

あえて「支配」という言葉を使っただけで、その後の世代というのは、これら児童文学の出版期を担った世代の求心力と遠心力に振り回されてきたといえるかもしれない。団塊の世代である僕もまた、その一人である。児童文学者協会の創立五〇周年の時のイベントだったと思うから、十数年前のことになるが、関西でのシンポジウムのパネラーとして発言した時に、(前後の文脈は定かでないが)古田足日に代表される現代児童文学の出版期を担った評論家たちは、いわば自分たちが現代児童文学を作ってきたわけだから、見取り図というか設計図を持っている。ところが後発の僕らはその設計図を持たないところで、すでにできている建築物にあれこれ言っているわけで、基本的にハンデイがあるのだ、というようなことを述べた。考えようによっては、設計図などお構いなしの強みというのもあるはずだから、いかにも情けない言い方ではあるが、実感ではあったのだ。

さて、どのジャンルであれ歴史ということがより意識されるのは、現在が見えにくくなっていることの反映という